

わかれ

国木田独歩

青空文庫

わが青年わかものの名を田宮峰二郎たみやみねじろうと呼び、かれが住む茅屋くさやは丘の半腹うづらにたちて美わしき庭これを囲み細き流れの北かたの方より走り来て庭を貫きたり。流れの岸には紅楓もみじの類たぐいを植えそのほかの庭樹きには松、桜、梅など多かり、栗樹くりなどの雑まじわるは地柄とちがらなるべし、——区何町の豪商が別荘なりといえど家も古び庭もやや荒れて修繕くろわんともせず、主人あるじらしき人の車その門とまに駐りしを見たる人まれなり、売り物なるべしとのうわさ一時は近所あたりの人の間に高かりしもいつかこのうわさも消えて跡あとなく、ただ一年ひととせ半ば以前よりこの年若き田宮の来たり住みつ。

年は二十はたちを越ゆるようやく三つ四つ、背高く肉やせたり、顔だ

ち凜々りりしく人柄も順良すなおに見ゆれどいつも物案じ顔に道ゆくを、出
であうこの地の人々は病める人ぞと判じいたり。さればまた別荘
に独り住むもその故ゆえぞと深くは怪しまざりき。終ひねもす日家ひねもすにのみ閉
じこもることはまれにて朝に一度または午後あたりに一度、時には夜に
入りても四辺あたりの野路のみちを当てもなげに歩み、林の中に分け入りなど
するがこの人の慣らないなれば人々は運動のためぞと、しかるべき
ことのようにうわさせり。

されどこの青わかもの年わかものと親しく言葉かわす人なきにあらず。別荘と
畑一つ隔たりて牛乳屋ちちやあり、櫛かしの木に取り囲まれし一二棟ふたむねは右な
るに牛七匹住み、左なるに人五人住みつ、夫婦ふとに小供こども二人、一人
の雇男おとこは配達人はいたつなり。別荘へは長男かしらの童わらべが朝夕二度の牛乳ちちを運べ

ば、わかもの青年いつしかこの童と親しみ、その後は乳屋ちちやの主人あるじとも微笑ほえみて物語するようになりぬ。されど物語はなしの種たねはさまざま多からず、牛の事、牛乳ちちの事、花客とくいさき先さきのうわさなどに過ぎざりき。牛乳屋ちちやの物食う口は牛七匹と人五人のみのように言いしは誤謬あやまりにて、なお驢馬ろば一頭あり、こは主人あるじがその生ふる国千葉さとよりともないしと
 いう、この家やには理由わけある一物ものなるが、主人あるじ青年わかものに語りしところによれば千葉なにかしなる某なにかしという豪農あはれのもとに主人あるじ使われし時、何かの手柄てにて特に与えられしもの由なり。さまざま美しというにあらねど童には手ごろの生き物ゆえ長かしらの児こが寵ちようあい愛あいなおざりならず、ただかの青年わかものにのみはその背を借すことあり。青年わかものは童の言うがまにまにこの驢馬ろばにまたがれど常に苦笑いせり。青年わかもの

には童がこの兎馬うさぎうまを愛めずるにも増して愛めで慈いつくしむたくましき
犬あればにや。

庭を貫く流れは門かどの前を通ずる路みちを横よぎりて直ちに林に入り、
林を出いずれば土地にわかにくぼみて一軒の茅屋くさやその屋根のみを現
わし水車みずぐるまめぐれり、この辺あたりには水車場多し、されどこは
いと小さき者の一つなり、水車場を離れて孫屋まごや立ち、一抱ひとかかえば
かりの檜かし七株八株一列に並びて冬は北の風を防ぎ夏は涼しき陰も
てこの屋をおおい、水車場とこの屋との間を家にわとり鶏の一群れゆき
きし、もし五月雨さみだれ降りつづくころなど、荷物ひ曳ける駄馬だば、水車場
の軒先に立てば黒き水は蹄ひづめのわきを白き藁わら浮かべて流れ、半ば眠
れる馬の鬣たてがみよりは雨滴しずく重したたく滴り、その背よりは湯気ゆげ立ちのぼり、

家にわとり鶏は荷車の陰に隠れて羽翼はね振るうさまの鬱陶うつとうしげなる、かの青年わかものは孫屋の縁先に腰かけて静かにこれらをながめそのわきに一人の老翁腕おきなこまねきて煙管きせるをくわえ折り折りかたみに何事をか語りあいては微笑ほほえむ、すなわちこの老翁おきなは青年わかものが親しく物言う者の一人なり。

水車場を過ぎて間もなく橋あり、長さよりも幅のかた広く、欄の高さは腰かくるにも足らず、これを渡りてまた林の間を行けばたちまち町の中ほどに出いず、こは都にて開かるる洋画展覽会などの出品うちの中にてよく見受くる田舎町いなかまちの一つなれば、茅屋くさやと瓦かわら屋やと打ち雑まじりたる、理髪所とこやの隣に万屋よろずやあり、万屋の隣に農家あり、農家の前には莛敷むしろきて童わらべと猫ねこと仲よく遊べる、茅屋くさやの軒先

には羽虫はむしの群れ輪をなして飛ぶが夕日に映りたる、鍛冶かじの鉄砧かなしき
の音高く響きて夕闇ゆうやみに閃ひらめく火花の見事なる、雨降る日は二十はたちば
かりの女何事をかかしましく叫びつ笑いて町の片側より片側へと
ゆくに傘かさささず襟えりくび頸くびを締め駒下駄こまげたつまだてて飛ぶごとに後ろ振
り向くさまのおかしき、いずれかこの町もかかる類たぐいに漏るべき、
ただ東より西へと爪つま先さき上がりの勾こう配ばいゆるく、中央をば走り流
るる小川ありて水みな上なみは別荘を貫く流れと同じく、町人まちびとはみな
この小川にてさまさまのもの洗いすすげど水のやや濁れるをいと
わず、流れには板橋いくつかかかりて、水際みぎわには背低かえでき楓をとこ
ろどころに植えたる、何人の思いつきにや、これいささかよそと
その風情ふぜいをことにせり。町の西にし端はづれに寺ありてゆうべゆうべの

鐘はここより響けど、鐘撞く男は六十を幾つか越えし翁なれば力
 足らず絶えだえの音は町の一端より一端へと、おぼつかなく漂う
 のみ、程近き青年が別荘へは聞こゆる時あり聞こえかぬる時も
 多かり。この鐘の最後の一打ちわずかに響きおわるころ夕煙巷を
 こめて東の林を離れし月影淡く小川の水に砕けそむれば近きわた
 りの騎馬隊の兵士が踵に届く長剣を左手にさげて早足に巷を上り
 ゆく、続いて駄馬牽く馬子が鼻歌おもしろく、茶店の娘に声かけ
 られても返事せぬがおかしく、かなたに赤児の泣き声きこゆれば
 こなたには童が吹くラツパの音かしましく、上る兵士は月を背に
 し自己が影を追うて急ぎ、下る少女は月さやかに顔を照らすか面
 恥ゆく、かの青年が林に次ぎてこの町を愛ずるも理なきにあら

ず。昨日きのうの事は忘れ明日あすの事を思わず、一日一日をみだらなる樂しみ、片時の慰みに暮らす人のさまにも似たりとは青年わかものがこの町を評する言葉にぞある。青年わかもの別荘に住みてよりいつしか一ひとと年せと半ばを過ぎて、その歳としも秋の末となりぬ。ある日かれは朝早く起きいでて常のごとく犬を伴い家を出いでたり。灰色の外套がいとう長く膝ひざをおおい露を避くる長靴ながぐつは膝に及び頭かしらにはめりけん帽の縁ふち広きを戴いたきぬ、顔の色今日はわけて蒼あおしろ白く目は異あやしく光りて昨夜の眠り足らぬがごとし。

門を出いずる時、牛乳屋ちちやの童わらべにあいぬ。かれは童の手より罎びんを受け取りて立ちながら飲み、半ば残して童に渡せば、童たなごころこれを掌てのひらにうつしては犬に与う。青年の目は遠く大空のかなたに向かえり。

空は雨雲ひくく漂い、木の葉半ば落ち失せし林は狭霧をこめたり。

青年わかものは童ひとに別れ、独り流れに沿うて林を出で、水車場の庭に

入れば翁おきな一人、物案じ顔に大空を仰ぎいたり。青年わかものの入り来た

れるを見て軽く礼いやなしつ、孫屋の縁先に置かれし煙草盆たばこぼんよりは

煙真直ますぐにたちのぼれり。君が今朝けさの装衣いでたちはと翁まず口を開きて

やや驚けるようなり。青年わかものは言葉なく縁先に腰かけ、ややあり

て、明日あすは今の住家すみかを立ち退くことに定めぬと青年は翁が問いに

は答えず、微笑ほほえみてその顔を守りぬ。そはまたいかにしてと翁は

いよいよ驚けるように目をみはりたり。されどまた七日の後には

再び来たりておもむろに告いとまごい別いせんと青年は嘆息ためいきつきて深く

物を思えるさまなり、翁ははたと手てを拍うち、しからばいよいよ遠

く西に行きたもうこととなりしか。否、西にあらず、まず東に行かん、まずアメリカに遊ぶべし、それよりイギリスに、その後はかねて久しく望みしフランスイタリヤに。これを聞きて翁の目は急に笑みをたたえ、父上もさすがにこの度は許したまいしか、まずまずめでたし、いつごろ立ちたもうや。月未なるべしと青年は答え、さればこの地もまたいつ帰り来て見んことの定め難く、また再び見ることかなうまじきやこれまた計り難ければ、今日は半日この辺りを歩みて一年と五月の間、わが慰めとなり、わが友となり、わが筆を教え、わが情を養いし林や流れや小鳥にまでも別れを告げばやとかくは装衣ちぬ、されど翁にはひとまず父の家に帰りて万事の仕度を終えし後、また来たりておもむろに別れ

を述べんと言いつつ青年は身を起こして庭に立ち、軽く礼いやして立ち去らんとす。翁はただ微笑ほほえむのみ、何の言葉もなく青年を打ちまもりつ。

青年の出いで行きし後、翁は庭の中をかなたこなたと歩み、めでたしめでたしと繰り返して独ひとりご言ちしが、ふと足を止め、眼まなこを閉じ、ややありて、されど哀れの君よと深ためいき嘆息をもらしぬ。

青年わかものは水車場を立ち出でてそのまま街ちまたの方へと足をめぐらしつ、
節々おりおり空を打ち仰あぎたり。間もなく巷ちまたに出いでぬ。

朝なお早ければ街ちまたはまだ往来ゆきき少なく、朝餉あさげの煙重く軒より軒へとたなびき、小川の末は狭霧ささぎり立ちこめて紗絹うすぎぬのかなたより上り来る荷車にぐるまの音はさびたる街ちまたに重々しき反響を起こせり。青年は

橋の一にたたずみて流れの裾すそを見下ろしぬ。紅くれないに染め出いでし楓かえでの葉末こに凝こる露は朝日を受けねど空の光を映して玉のごとし。かれは意こころにもなく手近の小枝を折り、真紅の葉一つを摘みて流れに落とせば、早瀬これを浮かべて流れゆくをかれは静かにながめて次の橋の陰に隠るるを待つらんごとし。

この時青年わかものの目に入りしはかれが立てる橋に程ほど近き楓の木陰こかげにうづくまりて物洗いたる女の姿なり。水に垂たれし枝は女の全身を隠せどなおよくその顔より手先までを透かし見らる。横顔なれば定かに見分け難きも十八、九の少女おとめなるべし、美しき腕ひじは臂ひじを現わし、心をこめて洗うは皿さらの類たぐいなり。

少女は青年に気づかざるように、ひたすらその洗うつわわ器を見て何

事をも打ち忘れたらんごとし。幾個かの皿すでに洗いおわりて傍
 らに重ね、今しも洗う大皿は特に心を用うるさまに見ゆるは雪
 白なるに藍色の縁とりし品なり。青年が落とせし楓の葉、流
 れて少女の手もと近く漂いゆくを、少女見てしばし流れ去るを打
 ちまもりしが急に手を伸ばして摘まみ、皿にのせて傍らに置きぬ。
 葉は水に湿いていよいよ紅に、真白の皿に置かれしさまは画めき
 て見ゆ。この時青年は少女の横顔の何者にか肖たるように覚え
 しも思い出ださざりき。ただ耳より腮にかけし肉づきはかれの画
 心を惹く殊に深かりしのみ。

由なき戯れとは思いつつも、少女がかれに気づかぬを興あるこ
 とに思いしか、はた真白の皿に紅の木の葉拾いのせしふるまいの

みやびて見えつるか、青年はまた楓の葉を一つ摘みて水に投げた
り。木の葉は少女の手もとに流れゆきぬ、少女は直ちに摘まみて
またかの大皿おおざらにのせたり。しかし今洗うは最後の品なり。

こたびは青年手に持ちし小枝をそつと水に落とせば、小枝は軽
く浮かびて回転めぐりつつ、少女の手もと近く漂いぬ。少女は直ちに
これを拾い上げて、紅くれないの葉ごとに水の滴したたり落つるを見てありしが
またかの大皿にのせ、にわかわかもに気づけるもののごとく振り向きた
り。青年の目と少女の目と空そらに合あひし時、少女はさとその面かおを
赤らめ、しばしはためらいしが急に立ちあがりかの大皿のみを左
手に持ちて道みちにのぼり、小走りに駆け入りしは騎馬隊の兵士が常
に集まりて酒飲ちまゆむこの街唯一の旗亭なり。少女は軒下にて足を停とど

め、今一度青年の方を見たり。

今こそ思い出いでぬ、今の少女の顔のよく肖にたりというはわが治は子るこなるを。げに治子の姉はらから妹なりと言わんもわれいかでたやすく疑い得うべき、ことに最初わが方を振り向きし時のまなざしは治子のと少しも違たがわず、かの美しき目とかくまでに相肖にたる眼まなこを持つおとめ少女のまた世にあらんとは思わざりしに。

されどこれもまたわが心の迷いなるべきか、われ治子を恋うる心の深きがゆえなるべきか。かく思いつづけて青わかもの年が手はポケツトの中なるある物を握りつめたり、その顔にはしつえばらく血の上のほるようなりしが、愚かなると言いし声は低ければ杖つえもて横の欄打ちし音は強く、足あしもと下なる犬は驚きて耳を立てたり。たちまち顔

は常の色に復かえりつ、後あとをも見ずして静かに街ちまたをのぼり往ゆきぬ。

犬はかれに先立ちて街ちまたを駆けのぼり早くかなたにありて青年わかもの

を待てり。登りつむればここは高台の見晴らし広く大空澄み渡る

日は遠おちかた方の山影鮮さんえいあざやかに、国境くにざかいを限る山脈林の上を走り

て見えつ隠れつす、冬の朝、霜寒きころ、銀しろかねの鎖くわの末かすかは幽なる空

に消えゆく雪の峰など、みな青年わかものが心を夢ゆめ心地こちに誘いかれが

身うちの血わくが常なれど、今日きょうは雲のゆきき早く空と地と一つ

になりしようにて森も林もおぼろにかすみ秋霧重く立ちこむる野の

面づらに立つ案山子かがしの姿もあわれにいずこともなく響く銃つつの音沈みて

聞こゆ。青年はしばし四辺あたりを見渡して停止たたずみつおりおり野路のみちを過よぎ

る人影いつしか霧深き林の奥に消えゆくなどみつめたる、もしな

みなみの人ならば鬱陶うつとうしとのみ思わんも、かれは然しからず、かれが今の心のさまとこの朝の景色けしきとは似通ふしう節あり、霧立ち迷うておぼろにかすむ森のさまは哀れに物悲し、これ恋なり。されどその幻のぞみに似て遠きかなたに浮かべるさまは年若き者の夢おもかげを倂おもかげにして希望のぞみという神の住みたもうがごとく、青年わかものの心これに向かいてはただ静かに波打つのみ。

林の貫ますくきて真直ますくに通う路あり、車もようよう通い得うるほどなれば左右こずえの梢は梢と交わり、夏は木の葉こをもるる日影鮮やかに落ちて人の肩にゆらぎ、冬は落ち葉深く積みて風吹く終よすがら夜物のささやく音す。一ひととせ年と五いつつき月の間にかれこの路を往來ゆききせしことを幾度たびぞ。この路に入りては人にあうことまれに、おりおり野菜たぐいの類

を積みし荷車ならずば馬上まきたばこ巻煙草をくわえて並み足に歩ませたる騎兵にあうのみ。今朝けさもかれはこの路を撰えらびてたどりぬ。路の半ばに時雨しぐれしめやかに降り来たりて間もなく過ぎ去りし後のちは左右の林の静けさをひとしおに覚え、かれが踏みゆく落ち葉の音のみことごとしく鳴れり。この真直ますぐなる路の急に左に折るるところに立ち木や疎まばらなる林あり。青年わかものはかねてよくこの林の奥深く分け入り、切り株などに腰かけて日の光と風の力とに変わりゆく林の趣をめて楽しみたりければ、犬もまたこの林になずみけん、今日も先に立ちて走り入りぬ。

木の葉半ば落ちて大空の透かし見らるる林を秋霧立ちこむる朝訪とわばいかに心騒がしき人もわれ知らず四辺あたりの静けさに耳そばた

つるなるべし。世の巷ちまたに駆けめぐる人は目のみを鋭く働かしめて
 耳を用いざるものなり。衷心うちこ騒がしき時いかで外界そとの物音を聞き
 得ん。

青年の心には深き悲しみありて霧のごとくかかれり、そは静か
 にして重き冷霧なり。かれは木の葉一つ落ちし音にも耳傾け、林
 を隔てて遠く響く轍わだちの音、風ありとも覚えぬに私語ささやく枯れ葉の音
 にも耳を澄ましぬ。山鳩やまばと一羽いずこよりともなく突然程ほど近こずえき梢
 に止まりしが急にまた飛び去りぬ。かれが耳いよいよさえて四辺あたり
 いよいよ静寂しずかなり。かれは自己おのが心のさまをながむるように思
 ても四辺あたりを見回しぬ。始めよりかれが恋の春はる霞がすみたなびく野辺べ
 のごとかるべしとは期せざりしもまたかくまでに物さびしく物悲

しきありさまになりゆくべしとは青年わかもの今さらのように感じたり。

かれに恋人あり、松本治子はることて、かれが二十二の時ゆくりなく

相見て間もなく相思うの人となりぬ。十年互いに知りてついに路

傍の石に置く露ほどの思いなく打ち過ぐるも人と人との交わりな

り、今日きょう見て今夜こよい語り、その夜の夢に互いに行く末を契るも人と

人との縁なり。治子がこの青年を恋うるに至りしは青年わかものが治子

を思うよりも早く、相思うことを互いに知りし時は互いの命は互

いの心に取りかわして置かれぬ、これ相見てより一月ひとつきとは経た

ざる間の事なり。親々おやおやはこの恋を許さざりき、その故ゆえはと問わ

ば言葉のかずかずもて許し難き理由いわれを説かんと、ただ相恋うるが

故にこの恋は許さじとあからさまに言うの直ちよくせつ截なるにしかず。

物堅しといわるる人々はげにもと同意すべければなり。げにそのごとくなりき。かくて治子は都に近きその故郷ふるさとに送り返され、わかもの青年は自ら望みて伯父おじなる人の別荘に独居し、悲しき苦しき一ひと年を過ぐしたり。

わかもの青年は治子の事を思い絶たんともがきぬ、ついに思い絶ち得たりと自ら欺きぬ。自ら欺けるをかれはいつしか知りたれど、すでに一度自ら欺きし人はいかにこれを思い付くともかいなく、かえつてこれを自ら誇らんとするが人の情こころの怪しき作用はたらきの一つなり。そこには必ず一個ひとつの言いわけあるものなり。この青年わかものはこれに天職ありと自ら約せり。この約束を天の入れたもうや否やは問うところにあらず。

かれは文学と画とを併あわせ学び、これをもつて世に立ち、これをもつてかれ一生せいの事業となさんものと志しぬ、家は富み、年は若し。この望みはかれが不屈の性と天稟てんりんの才とをもつてしては達し難きものにあらず。かれはこれを自信せり。一ひととせ年の独居はいよいよこの自信を強め、恋の苦しみと悲しみとはこの自信と戦い、かれはついに治子を捨て、この天職に自個こごを捧ぐべしと自ら誓いき。後の五いつつき月はこの誓いと恋と戦えり。しかしてかれ自ら敗れ、ついに遠く欧州に走らばやと思ひ定めき。最初父はこれを許さざりしも急にかれの願いを入れて一日も早く出しゅつ立たつせよと命ずるごとくに促しぬ。

昨夜治子より手紙来たり、今日午過ぎひるひそかに訪問おとずれて永とこしえ久

の別れを告げんと申し送れり。永久とこしえの別れとは何ぞ。かれの心
 はかき乱されぬ。昨夜はほとんど眠らざりき。行く末のかれが大
いもう望は霧のかなたに立ちておぼろながら確かにかれの心を惹ひき、
 恋は霧のごとく大望を包みて静かにかれの眼めのまえ前に立ちふさがり、
 かれは迷いつ、怒りつ、悲かなしみ哀と激昂げつこうとにて一夜ひとよを明かせり。
 明けがた近くしばしまどろみしが目さめし時はかれの顔真まつ蒼さおな
 りき。憂えも怒りも心の戦いもやみて、暴風一過、かれが胸には
 一片の秋雲凝つて動かず。床にありていずこともなく凝視みつめし眼まなこ
 よりは冷ややかなる涙なみだ、両の頬ほおをつたいて落ちぬ。『ああ恋しき
 治子よ』と叫びて跳はね起きたり。水車場おきなの翁はほぼかれが上を知
 れるなり。

この時またもや時雨しぐれまば疎らに降り来たりぬ。その軽き一滴二滴に
 打たれて梢こずえより落つる木の葉の風なきにひるがえるさまを青年わかもの
 は心ありげにながめたり。時雨しぐれの通りこせし後は林の中うちしばし明
 るくなりしが間もなくまた元の夕ゆうやみ闇ほの暗きありさまとなり、
 遠方おちかたにて銃つつの音かすかに聞こえぬ。青年わかものは身を起こしてしば
 し林の中うちをたどりしが、直ちに路みちにはいり、路に近けれど人目
 に隠るる流れの傍かたわらにいたり。こはかれが家の庭を流れてかの
 街ちまたを貫くものとは異なり、遠き大川より引きし水道たぐいの類ゆえ、幅
 は三尺に足らねど深ければ水層みずかさ多く、林を貫くあた辺りは一直線に
 走りて薄暗きかなたより現われまた薄暗き林の木陰こかげに隠れ去るな
 り。村の者が野菜洗うためにとてこの流れの幅をことさらに広く

掘り、小さき入り江をなせる、いつもかれが好みて訪とい來るところにいで落ち葉を敷きつ、茅ちがや、野ばら、小笹おささの類たぐい入り乱れし藪やぶ叢

を背にしてうづくまり、前には流れの音もなく走るをながめたり。

ねっしや

熱沙ねっしや限りなきサハラを旅する隊商も時々は甘き泉わき緑の木

陰涼しきオーシスに行きあいて堪たえ難き渴かわきと死ぬばかりなる疲つ

かれいや

労かを癒いする由あれど、人生まれ落ちての旅路たびじにはただ一度、恋ち

ましみず

よう真清水をくみ得てしばしは永とこしえ久の天を夢むといえども、こ

の夢はさめやすくさむれば、またそのさびしき行程みちにのぼらざる

おぐら

を得ず、かくて小暗おぐらき墓の門に達するまで、ついに再び第二のオ

ーシスに行きあうことなく、ただ空むなしく地平線下に沈みうせぬる

ましみず

おも

かの真清水を懐おもうのみ、げにしかり、しかしてわれ今、しいて自

らこのオーシスに分かれんとす、しいて自らこの夢を破らんとす。これまことにわれの堪え得べき事なるか。

恋の泉はいつもいつもわきて流れ疲れし人をまてど、この泉の

濶ほとりにて行きあう年若き男女の旅人のみは幾度か幾度か代わりゆき、

かつ若者に伴いし乙女おとめ初めは樂しげにこの泉をくめどたちまちそ

の手を差しいれてこれを濁し、若者をここより追いやりつ、自己おのれ

もまたあえぎあえぎその跡を逐おうて苦しき熱きさびしき旅路にの

ぼる。わが友の上にもこの事あり、わが読みし文の中にもこの事

多し。されど治子は一度われをこの泉の濶ほとりに導きしより二年ふたとせに

近き月日を経て今なおわれを思われを恋うてやまず、昨夜の手

紙を読むものたれかこの清き乙女おとめを憐あわれまざらん。しかしてわれ今、

真中まなかにのこしゆかんとす。これまことにわれの忍び得ることなるか。
 真中まなかにのこしゆかんとす。これまことにわれの忍び得ることなるか。

われ近ごろ、猛たけき獅子ししと巨蟒おろちと、沙漠の真中まなかにて苦闘するさま
 を描ける洋画を見たり。題して沙漠の悲劇というといえどもこれ
 ぞ、すなわちこの世の真相なるべきか。げにこのわれなき世こそ
 治子まなこの眼にはかくも映るなるべし。しかしてわれはいかん、われ
 はいかん。

青年わかものは恋を想おもい、人の世を想い、治子を想い、沙漠を想い、
 ウオーシスを想い、想いは想いをつらねて環まわり、深き哀かなしみより
 深き悲しみへと沈み入りぬ。風の音は人の思いを遠きに導き、水

の流れは人の悲^{かなしみ}哀^{あはれ}を深^いきに誘^{いざな}う。かれが前なる流れは音もせで
 淀^{よど}みなく走るを、初めかれ心なくながめてありしが、見よ、水^{みなか}
 上^みより流れ来たる木の葉を、かれはひたすらながめ入りぬ。紅
 の葉、黄色の葉、大小さまさまの木の葉はたちまち木陰^{こかげ}より走り
 いでてまた木陰にかくれ走りつ。たちまち浮かびたちまち沈み、
 回^{めぐ}転りつ、ためらいつす。かれは一つを見送りつまた一つを迎え、
 小なるを見失いては大なるをまてり。かれが心のはげしき戦いは
 昨夜にて終わり、今は荒^{こうり}寥^{よう}たる戦後の野にも等しく、悲風慘^さ
 雨^{らん}ならび至り、力なく光なく望みなし。身も魂^{たま}も疲れに疲れて、
 いつか夢^{ゆめ}現^{うつ}の境に入りぬ。

林あり。流れあり。梢^{こずえ}よりは音せぬほどの風に誘われて木の葉

落ち、流れはこれを浮かべて走る。青年わかものあり、外套がいたうの襟えりに頸くび
 を埋うずめ身を縮めて眠れる、その顔は蒼白あおしろし。四辺あたりの林もしばしは
 この青年に安き眠りを借さばやと、枝頭しとうそよがず、寂せきとして音な
 し。流れには紅黄こうこう大小かずかずの木の葉、たちまち来たりたち
 まち去り、緩ゆるやかに回めぐ転りて急に沈むあり、舟のごとく浮かびて
 静かに流るるあり。この時東の空、雲すこしく綻ほころびて梢の間より
 薄き日の光、青年の顔に落ちぬ、青年は夢に舟を浮かべて清き流
 れを下りつつあり、時はまさに春の半ばなり。左右の岸は新緑の
 光に輝き、仰げば梢と梢との間には大空澄みて蒼く高く、林の奥
 は日の光届いたきかねたれど、木この間ま木の間よりもるる光はさまざま
 の花を染め出いだし、涼しき風の枝より枝にわたるごとに青き光と

黒き影は幾千万となき珠玉の入り乱れたらんごとく、岸に近き桜
 よりは幾千すうせんの胡蝶こちよう一時に梢を放れ、高く飛び、低く舞う。流
 れの淀むところは陰暗く、岩を回れば光景瞬間めぐに變じ、河幅急かわはば
 に広まりぬ。底は一面の白砂はくさに水紋落ちて綾あやをなし、両岸は緑野
 低く春しゆんそう草煙り、森林遠くこれを囲みたり。岸に一人ひとりの美わし
 き少女おとめたたずみてこなたをながむる。そのまなざしは治子にに肖て
 さらに気高けだかく、手に持つ小枝をもて青年を招まねぐさまはこなたに舟
 を寄せてわれと共に恋の泉をくみたまわずや、流れ流れていずこ
 までゆかんとしたもうぞ、流れの末は波荒き海なるをといえるが
 ごとし。流れの末を打ち見やれば春はるがすみ霞はるがすみたなびきたり。かれは
 しばしためらいつ、言い難かなしみき悲かなしみ哀胸あはれを衝ついて起おとめこりぬ。少女は

見て、その悲哀を癒す水はここにありと、小枝を流れに浸しこなたに向かいて振れば、冷たき沫飛び来たりて青年の頬を打ちたり。春の夢破れぬ。

風起こりて木の葉あらしく鳴りつ、梢より落つる滴りの落ち葉をうつ音雨のごとし。かれは静かに身を起こし、しばらく流れをみつめてありしが、心はなお夢路をたどれるがごとく、まなざしは遠き物をながむるさまなり。外套のポケットに差し入れし手先に触るる物あるをかれは堅く握りて眼を閉じつ。

この時犬高くほえしかば、急ぎて路に出で口笛鋭く吹きつつ大股に歩みて野の方に向かい、おりおり空を仰ぎては眉をひそめぬ。空は雲の脚はやく、絶え間絶え間には蒼空の高く澄めるが

見ゆ。

青年は絶えずポケットの内なる物を握りしめて、四辺あたの光景には目もくれず、野を横いぎり家路えいじへと急ぎぬ。ポケットの内なるは治子よりの昨夜の書状てがみなり。短き坂道に來たりし時、下より騎兵二騎、何事をか声高に語らいつつ登りくるにあいたれどかれはほとんどこれにも気づかぬようにて路をよけ通しやりぬ。騎兵ゆき過ぎんとして、後あとなる馬上の、年若き人、言葉に力を入れ『……に候そろあ間いだ至急、「至急」という二字は必ず加えざるべからず』
 と言うや、前なる騎兵、『無論、無論……』と答えつ、青年わかものの耳たてし時は二騎の姿すでに木立ちにかくれて笑う声のみ高く聞こえたり。青年はさらに路をいそぎぬ。

*

*

*

*

——停車場ばの時計、六時を五分過ぎ、下りの汽車を待つ客七、
 八人、声立てて語るものなければ寂寥さびしさはひとしおなり。ランプ
 のおぼつかなき光、隈くまぐま々には届きかねつ。大空晴れて星の数も
 よまるるばかりに、風は北よりそよぎて夕暮れの寒さに人々は身
 をちぢめたり。発車にはなお十分を待たざるを得ず。

この時切符を売りはじめしかば、人々みな立ちて箱の前に集ま
 りし時、外ほかより男女なんによふたり二人の客、静かに入り来たりぬ。これ松本
 治子と田宮峰二郎なり。青年は切符を買いて治子に渡し、二人は
 人々に後おくれてプラットホームかたの方に出いで、人目を避くるごとく、

かなたなる暗きあたりを相並びて歩めり。治子はおりおり目にハ
ンケチをあてて言葉なし。青年は窮きわみなき空高くながめ、胸さく
るばかりの悲かなしみ哀をおさえて、ひそめし声に力を入れ、『必ず手
紙を送りたまえ、今こそわが望みは君が心なれ。』

慷こうがい慨がいに堪たえざるものごとく、『君を力にてわが望みは必ず
遂げん。』熱き涙一滴、青年が頬ほおをつたいしも乙女おとめは知らず。ハ
ンケチを口にくわえて齒をくいしばりぬ。しばし二人は言葉なく
立てり。汽笛高く響きし時、青年は急ぎ乙女の手を堅く握り、言
わんとして言うあたわず、乙女がわずかに『御身おんみを大切に』と声
もきれぎれに言うや『君こそ、君こそ、必ず心たしかに忍びたま
え、手紙を忘れたもうな。必ず……。』

青年はその夜、十時ごろ茅屋くさやに帰りぬ。筆を走らして、おりおり嘆息ためいきつきつつ、

『われ君を思い断たんともがきしはげに愚かの至りなりき。われ君を思うこといよいよ深くしてわれますます自ら欺かんと企てぬ。思い断ち得てしかして得るところは何ぞ、われにも君にも永ながくいやし難き心の傷なるべし。しかしてわがいわゆる天職なるもの果たして全く遂げらるべきや。ああ愚かなる。げにわが血は荒れて事業事業と叫ぶ声のみぞいたずらに高く、その声の大なるに自ら欺かれてわれに限りなき力ありと思いき。』

この時、風一陣、窓に近き栗くりの梢こずえを魔ものありて揉もみしよなる音す。青年は筆を止めて耳傾くるさまなりしが、

『わが力いずこにありや。口渴かわきし者の叫ぶ声を聞け、風にもま
 るる枯葉こようの音を聞け。君なくしてなお事業と叫ぶわが声はこれな
 り。声かれ血か涸なみだれ涙なみだ涸なみだれてしかして成し遂ぐるわが事業こそ見物みもの
 なりしに。ああされど今や君はわが力なり。あらず、君を思うわ
 が深き深き情けこそわがゆくすえ将来まことの真の力なれ。あらず。われを思
 う君が深き高き清き情けこそわがゆくすえ将来まことの血なれ。この血は地の
 底を流るる春の泉なり。草も木も命をここに養い、花もこれより
 開き、実を結ぶもその甘き汁はすなわちこの泉なり。こは詩的形
 容にあらず、君よ今わが現に感ずるところなり。

昨夜までは、わが洋行も事業の名をかりて自ら欺く逃走なりき。
 かしこは墳墓なりき。今やしからず。今朝けさより君が来宅までわが

近郊の散歩は濁水暫時地を潜りし時のごとし。こはわが荒き感情の漉されし時なり。再び噴出せし今は清き甘き泉となりぬ。われは勇みてこの行に上るべし。望みは遠し、されど光のごとく明し。熱血、身うちに躍る、これわが健康の徴ならずや。みな君が賜なり。』

青年の眼は輝きて、その頬には血のぼりぬ。

『されば必ず永久の別れちよう言葉を口にしたもうなかれ。永久の別れとは何ぞ。人はあまりにたやすく永久の二字を口にす。恐ろし二字、厳かなる二字、人を生かし人を殺す二字。永久の望み、永久の死、人はこの両極に呼吸す。永久の死なき者に永久の別れありや。されど死という一字は人容易に近づきて深く感ずる

を得ずといえども、別れの一字は人々の日々親しく感ずるがゆえに、もし人、この一字に永久の二字を加えて静かに思いきわめなばその胸さけん。君とてもしかり。これわれと永久とこしえに別れて無究に相見ず、われは北極の氷と化し君は南極の石となりて、感ぜず思わず、限りなく相見ずと思いたもうともなお忍びたもうことを得るや。愛児を失いし人は始めて死の淵ふちの深きに驚き悲しむと言ひ伝う、わが知れる宗教家もしかいえり。こは誤感のみ。かれが感ずるは死にあらず、別れなり。その哀かなしみは死を悲しむにあらず、別れを悲しむなり。死は形のみ、別れは実じつなり。たれか愛と永久とこしえの別れと両立せしめ得るものぞ。千年万年億々年の別れを悲しまず、実に永久とこしえの別れを悲しむ。否、われは永久とこしえの別

れを信ぜざるなり。愛の命はこの信仰のみ、われらが恋の望みは
 実にここにあり。否、君のみにあらず、われは一目見しかの旗亭きてい
 の娘の君によく肖にたると、老い先なき水車場の翁おきなとまた牛乳屋ちちやの
 童わらべと問わず、みなわれに永とこしえ久とこしえの別れあるものぞとは思ひ忍ぶあ
 たわず。ああ天よ地よ、すべて亡ほろびよ。人と人とは永とこしえ久とこしえに情の
 世界のほに相見ん。君よ、必ず永とこしえ久とこしえの別れを軽かろがる々しく口にも筆に
 も上のほしたまいそ。これ実にわれの耐うるところにあらず。君を恋
 うることの深きによりて、われ初めてこの深き悲哀を知り、さら
 に限りなきの望みと力とを得たり。運命の力は強し、君とこの世
 にまた相見ることなかるべきやを思うだに、この心破れんとす、
 いわんや永とこしえ久とこしえの別れをや。』

この時、夜ふけ、遠き林をわたる風の音の幽かに聞こゆるのみ、
 四辺は寂として声なし。青年はしばし、夢みるごときまなざし遠
 く、ややありて『わが夜もふけぬ。君今は静かに休みておわさん。
 わが心哀し。人々みな懐かし。わけても君恋し。ああたれか永
 久の別れというや。否、否、否……。』

かれは掌もて顔をおおい、臂を机に立てつ、目の前には牛乳屋、
 水車場、小川流るる巷、林の奥、木の葉浮かびて流るるまつすぐ
 の水道、美しき優しき治子、翁、童、驢馬に至るまで鮮やかに浮
 かび出でしが、たちまちみな霧に包まれて消え、夢に見し春の流
 れの岸に立つ気高き少女現われぬ。そは真の治子の姿とかわらざ
 りき。

(明治三十一年十月作)

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「文芸倶楽部」

1898（明治31）年10月

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2012年7月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

わかれ

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>